

2015年9月20日永眠者追悼記念礼拝

天の故郷を目指して

加藤 享

[聖書] ヘブライ人への手紙 1 1章 13～16節

この人たちは皆、信仰を抱いて死にました。約束されたものを手に入れませんでした。はるかにそれを見て喜びの声をあげ、自分たちが地上ではよそ者であり、仮住まいの者であることを公に言い表したのです。このように言う人たちは、自分が故郷を探し求めていることを明らかに表しているのです。もし出て来た土地のことを思っていたのなら、戻るのに良い機会もあったかもしれませんが。ところが実際は、彼らは更にまさった故郷、すなわち天の故郷を熱望していたのです。だから、神は彼らの神と呼ばれることを恥とさせません。神は、彼らのために都を準備されていたからです。

[序] 忘れずに覚え続ける

私たちの川越教会も1968年5月5日に岸町のアパートの一室で**第一回の日曜礼拝**を守ってから**47年余**、1985年6月23日に教会員33名で**教会組織感謝礼拝**を守ってから**30年余**がたちました。この間に教会員の中で地上での信仰の生涯を終えて**永眠**された兄弟姉妹は、記録によりますと**10名**です。

シンガポールから帰って来た私達夫婦が、不思議なお導きで川越教会にお仕えするようになって8年余になりました。私の代になってから召された方は4名です。そのうちの3名の方々はよく存じていますが、7人の方がどのように教会生活をおくられたのか存知上げません。でも**どのお方も**、川越教会を愛し、礼拝を共に守り、教会の交わりと働きを豊かにして下さった**大事な教会家族**であったことに変わりありません。ですから私たちは、いつまでも**忘れずに覚えて感謝し**、主のお守りを祈り続けて参りたいと思います。

昨年の追悼文集を少し補充することができました。この機会にこの10名の兄弟姉妹の記事を、あらためて読み返して頂きたいと思います。またここに記されていないことで、分かち合いたい思い出がありましたら、お知らせ願います。来年の追悼文集に追記させていただきます。

[1] 10人の面影

お手許の追悼文集の第2頁をお開き下さい。**1. 田中 秀 姉**は、今日もオルガン奏楽の奉仕をされている伊藤三恵子さんの母上です。**女子聖学院中高**

校の教師を40数年にわたってなされたクリスチャンです。三恵子さんは女子聖学院中学3年になった4月のイースターに、目白ヶ丘教会で**バプテスマ**を受けましたが、高円寺教会員のお母さんは自分の時よりも嬉しいと喜んで、目白の礼拝に出席して、副牧師の私にも何卒宜しくとご挨拶くださいました。今もよく覚えています。**現役を引退されてから**、川越教会に転入会され、毎週水曜日自宅での家庭集会を楽しみにし、晩年には、福島教会に転任された小久保牧師夫妻に会いに、時々福島を訪れて礼拝にも出席されたそうです。

2. 高柳しげ子姉は、**4. 高柳千代姉**のお嬢さんです。病弱で、お母さんが晩年に転んで左腕を骨折し、曲がった腕の矯正のために再入院中の病院に、しげ子さんも脳腫瘍で倒れて入院し、お母さんがそのまま病院に泊まり込んで、しげ子さんの看病に当たったそうです。その時に、長い間の懸案だった信仰の決心が与えられて、藤沢牧師から**病床洗礼**を受けました。「おめでとう」という言葉に「これで母と同じ所に行けます」と返事された由。そして一か月も経たずに永眠されたのでした。

しげ子さんの母**高柳千代姉**は、岸町のアパートでの川越教会**第一回の礼拝出席者**です。小久保牧師夫妻と後藤陽子姉と4人の礼拝だったそうです。37才で夫と死別し、二人の娘さんを育てるために、ジョンソン基地のハウスメイドとして働き始めました。そしてグラント宣教師の聖書研究会に出席し、同じ川越から通う後藤姉と親しくなり、**大宮教会**で二人一緒にバプテスマを受けました。そして川越開拓が始まるとともに川越伝道所の会員になったのでした。以来ほぼ**30年間**、教会のために奉仕してくださいました。そして念願の聖地旅行に二回参加し、**エルサレムで召された**のでした。その様子は小山さんのレポートに記されています。教会にとっては、まだまだいて欲しい家族のお一人でしたが、神さまからのご褒美の召され方と言えるかもしれません。

3. 岩井慶司兄は、千代田生命の浜松勤務時代、26才の時に浜松教会でバプテスマを受けられ、**42才の時に宇都宮教会から川越教会に転入会**されました。ご夫婦もお子さん達もがっしりとした体格の一家だったそうです。オーストラリアに移住して晩年を過ごそうと会社を早期退職し、家財も整理していざ出発の段階で、どうしても就労旅券が取得できず、やむなく計画を変更。住居も教会から遠方となって、礼拝出席も遠のいてしまわれました。**交通事故**で亡くなった由。もっと連絡をとり続けるべきだったと、残念です。

5. 丸田志加姉は、小名木裕子姉の母上です。明治41年に東京の深川で生ま

れ、女学校時代に関東大震災で家を失い水戸に転居、やがて東京に戻られました。和英タイプを習い、霊南坂教会にも通いました。イギリスの国歌を英語ですらすらと歌う人だったそうです。日清製粉に勤め、同じ職場の丸田将男兄と結婚、川越に暮すようになりました。晩年に裕子さんが通う川越教会の礼拝に出席するようになり、**79才のクリスマス**にバプテスマを受け、90才で永眠されました。優しい母で、裕子さんには厳しく叱られた記憶がないそうです。

6. 三木 圭子姉は、YWCA でタイピストをされて、英語が堪能、資生堂のポスターのモデルをなさったそうです。埼玉に移住するようになり、**76才**の時に川越教会に転入会されました。依然として**おしゃれで知的な方**で、都内に出かけて聖書講座を受けておられました。**聖書の読み方**がユニークで、大いに刺激を受けたそうです。ご主人の常緑（ときわ）さんの葬儀は、教会員ではありませんでしたが藤沢牧師の司式で行われました。礼拝の終わりによく歌われる頌栄541「**ときわ**にたえせず みさかえあれ アーメン」を歌うと、**主人を想い出す**と、よくおっしゃっていたそうです。本当に優しい母で、叱られた思い出がないと、娘の志津子さんが語っておられます。

7. 金田禮子姉の72年の生涯の半分は**入退院を繰り返す闘病生活**だったようです。藤澤牧師夫妻がよくお世話されていました。しかし72才の禮子姉が入浴中に倒れて急逝された時、ご家族は**川越教会が無牧師だと思っ**て、夫の尚哲さんの家族が初雁教会員なので、上岡牧師に川越斎場での葬儀の司式を依頼されたのでした。私はその2年前から赴任していたのですから、これは牧会上の大失態です。今回、藤澤先生を通してその事実を知り愕然としました。ご本人はもとより、ご家族に対しても、教会員の皆さんに対しても、本当に申し訳なく思います。二度とこのようなことが起こらないように、皆さんと一緒に心がけて、教会員の交わりを緊密にして参りましょう。

8. 菊地敏明兄は、ピアノの上に掲げられている**聖句**「見よ、兄弟が共に座っている なんと恵み なんと喜び」（詩編 133：1）を書きのこしてくださった兄弟です。この書と共に今も礼拝を一緒に守って居られます。満州育ちで、敗戦後に引き揚げて来られました。海上自衛隊時代に青山学院大学を卒業。**書道**に打ち込み師範となり、**囲碁**もアマ5段、満州育ちで**スケート**も得意、**自動車好き**の絆で小久保牧師と結ばれ、川越教会に腰を据えることになりました。多芸多趣味、話題が豊かで、二人で話をし始めると、あっという間に2～3時間たちました。礼拝後に暖炉の周りで、宣教主題について**根源的な鋭い問い**を発しておられたそうです。私の説教についても、皆さん、どうぞその

」

ような問いを發してください。お願いします。

9. 磯部信之兄は、2012年4月4日に念願の教会墓地が完成、8日（日）イースター礼拝後に墓地に行き、彼の司式で奉獻感謝礼拝をしました。ところがその翌日に虚血性心疾患で急逝されたのでした。墓地委員として**教会墓地に第一番に入墓**されました。磯部兄といえば礼拝ばかりでなく水曜夜の祈禱会も**皆勤出席**、牧師にとってこれほど心強い支え手はいませんでした。亡くなる3月前のコラムに75才誕生日の心を、聖歌622にたくして語っておられます。「夕べ雲焼くるを見れば、業やむる時の間の間近き今、神の前に**我いそしまん**」まだまだ川越教会を守り育てて欲しかったとしきりに思う今日この頃です。今日の会衆賛美に、讚美歌大好きの彼の愛唱歌を二曲選びました。

10. 鈴木郁男兄は、菊姫さんと再婚なさるに当たって、川越教会の礼拝に出席し始めました。しかし2年後に**癌**におかされて**入退院**を繰り返され、自分から**病床洗礼**を申し出られました。そこで礼拝の席上で皆さんに報告して承認を得、礼拝後に鈴木宅に伺い、洗礼式を行いました。普段礼拝に出席しておられた近所の**国際教会**の大澤牧師始め会員有志も参加して下さいました。私たちは、これを機会に主から癒しを頂いて、教会生活を守れるようになることを期待したのですが、**翌日呼吸困難に陥り**、急逝されました。郁男兄自身が**神の時**を示されて洗礼を申し出られたのだなど、私は教えられました。**自分の終わりの時を知る**と言うことも大切ですね。

[2] キリストが迎えに来て下さる

さて私たちも、この10人の兄弟姉妹と同じ様に、地上の生涯を終える時を迎えます。そして墓に葬られます。**天国には何時**迎えられるのでしょうか。

神の民の始祖**アブラハム**は、文明の発祥地メソポタミアの出身ですが、神の声を聞いて行き先もよく知らないままに出立しました。そして辺鄙なカナン地方に来ると、この地をお前の子孫に与えると神の声を聞きました。**目的地に到着**したのです。

ところが彼は、そこに家を建てないで天幕生活を続け、**寄留者の生涯**を通しました。息子**イサク**も孫の**ヤコブ**も、アブラハムにならって家を建てませんでした。私たちの多くは、ここが自分の**定住の地**だと決めたら、**自分の家**を建てるか購入します。どうしてアブラハムたちはそうしなかったのでしょうか。

」

新約聖書の信仰者たちは、アブラハム達の信仰を「**神が設計者であり建設者**である堅固な土台を持つ**都**を待望していたから」「**更にまさった故郷、すなわち天の故郷を熱望していたから**である」(ヘブライ 11:16)と受け取りました。彼らにとっては、この地上の生涯が全てではなかったのです。神のお傍で共に暮らせる天の故郷、はるかに良い**神の都での永遠の生涯を待望しつつ**、地上の生涯を送ったのでした。

彼らは地上の生涯を閉じて葬られる**墓**を、天の故郷に迎えられる日を**待つ所**、そして待っている状態を**眠りにについている**と理解したのでした。信仰を同じくする家族一同が皆同じ墓に眠って、天の故郷に迎えられる**朝を一緒に待つのだ**という信仰を持っていたのです。

主イエスも十字架の死が迫って来た気配に、自分たちの**将来の不安**におびえ始めた弟子たちにおっしゃいました。「心を騒がせるな。わたしの**父の家には住む所がたくさんある**。行って場所を用意したら、戻って来て、あなたがたをわたしのもとに**迎える**。こうしてわたしのいる所に、あなたがたもいることになる。」(ヨハネ 14:1~3)

主は十字架の死を遂げ、墓に葬られましたが、復活されました。そして弟子たちと40日間共に過ごして、失いかけた彼らの信仰を復活させると、お独りで**天に戻っていかれました**。地上の墓がキリストの終の棲家ではなかったのです。では主イエスは**何時**私達皆を天に迎えるために戻って来て下さるのでしょうか。

パウロの書いた一番古い手紙には、こう述べられています。「すなわち合図の号令がかかり、大天使の声が聞こえて、神のラッパが鳴り響くと、**主ご自身が天から降って来られます**。するとキリストに結ばれて**眠りについた人**たちがまず最初に復活します。」(Iテサロニケ 4:16)

そして新約聖書最後の書ヨハネの黙示録は終わりの21~22章で、**キリストの再臨**によってもたらされる、死も悲しみも嘆きも労苦もない**新しい天と地**について記述して、「**アーメン、主イエスよ、来て下さい**」の言葉で終了しています。

そうですね。世界中の国の人々が、それぞれの栄光と誉れを携えて集まって来て、喜び合って**仲良く暮らせる世界**がもたらされたら、どんなに嬉しいことでしょうか。これこそが、神が備えて下さって居る**天の故郷**ではないでしょうか。救い主キリストが来て下さることを、心から祈り求めているものです。

」

【結】 天の故郷を目指して

今日の聖書は、「この人たちは皆、信仰を抱いて死にました。**約束されたものを手に入れませんでした**が、はるかにそれを見て喜びの声をあげ、自分たちが地上ではよそ者であり、**仮住まいの者**であることを公に言い表したのです。」と私たちに語っています。

私たちは先に召された 10 名の教会家族を偲んで、記念礼拝を守っています。この方たちも、あのイエス・キリストによってご自身を現してくださった全能にして溢れる愛の父なる神が用意して下さって居る素晴らしい**天の住まい**を待ち望んで眠りにつき、キリストの再臨を待っておられます。

そして、「さあ貴方たちも与えられた地上の生涯をしっかりと生き抜いて、**天の故郷を目指して、平安な眠りを共にしましょう**」という明るい信仰の呼びかけがをしておられます。私たちも「**彼らは更にまさった故郷、天の故郷を熱望していたのです**」という信仰を証しして参りましょう。

祈ります。私たちに今年もこのように愛する教会員の追悼記念礼拝を守らせて下さいまして、有難うございます。あなたから与えられた地上の生涯、それぞれご苦勞されたことでしょうか、あなたはお一人お一人に、素晴らしい天の故郷を用意して下さって居ることを感謝します。あなたにあっては「千年も一日の如し」でしょうか、救い主イエス・キリストが迎えに来て下さる主の再臨が、どうか一日も早く来ますようにお願いします。私たちもそれぞれに与えられた地上の生涯を、感謝しつつ精一杯に生き抜くことができますように、お導きください。救い主イエス・キリストの御名によってお祈りします。アーメン